死者と生者の間に①

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

人間は死についていろいろな解釈を行ってきました。死についての宗教的な教説もさまざまあります。また、『死を考える事典』が提示する死や臨終を考える諸項目は、死が人間の生や社会生活の多岐にわたる分野に関係していることを示しています。そして死の定義は、社会の受容の仕方によって変化していくとも述べています。このような変化は生者と死者との関係にも反映されているようです。

葬送の儀礼（葬儀、葬儀祭式）

誰かが死を迎えると、通常お葬式が行われます。『死を考える事典』（*Encyclopedia of Death and Dying*、グレニス・ハワーズ、オリヴァー・リーマン編、東洋書林、2007年）は、「葬儀」「葬送業者」「葬儀の歴史的考察」「葬儀屋」の４つの項目で、これについて記述します。「葬儀」の項目は「葬儀祭式の存在とその重要性に関しては多くの説明がある」（p.387）とした上で、葬送というものの意味あるいは役割や様式の違いなどが概観されています（pp.397～399）。

◇葬儀は、生きている者が死者の蘇りを怖れることを示唆。葬儀は、死者をあの世に送り出すための手段。

◇（葬儀は悲しみと密接な関係がある、あるいは罪悪感の浄化手段と考えられたとしても）生き残った者を慰撫する手段。服喪および服喪期間は遺族が喪失感に適応するためにある。ここから社会的な存在である人間は、共同体の成員喪失との折り合いをつける必要から生まれたことになる。

◇死者との決別。

◇葬儀は社会ごとに異なった様式をもつ。

◇葬儀には、遺体処理と生き残った人々との再結合という二重の目的がある。その意味や目的、方法や内容には、地理的な制約や文化や宗教によって違いが認められる。

＊故人をあの世へと送り出すために適切な準備作業（あの世で故人が必要なものの準備と埋葬。古代エジプト、オーストラリアなど）。＊火葬（ヒンドゥー教など）／埋葬（イスラームなど）／鳥葬（もしくは腐朽）（パルシー教、チベット）。＊喧騒の中での送出し／厳粛な雰囲気。＊故人の年齢、社会階層、ジェンダー、民族、職業上の地位などで内容に違い。＊現代の葬儀に反映するものには、宗教上の好み、人種にもとづく関係、村落か都市かという背景にもとづいた関係、階級やその他の社会的要因がある。＊現代西洋社会の傾向として、葬儀は人間関係の再結合、あるいは生から死、妻から未亡人といった状況変化のメカニズムと考える。＊業者の存在（事務的に処理する商業的専門家の登場とその役割・需要）。＊国葬や政治的意味を持つ葬儀。

葬儀が表す死者

このように、葬儀には、死者との決別だけでなく、死者を「あの世」（生者が生きている世界ではない）へと送り出しつつも、その死者と別れなければならない生者へのケアという目的があります。もちろん、死体（遺体）をどうするのかという実際的な問題を解決することにもなります。その方法は、地理的な状況や死をどのように考えるかによって異なっていて、たとえばパルシーの人が埋葬しないのは、大地や海を汚さないためと言われ、ヒンドゥーの人が火葬するのは、火の神アグニによって浄化してもらい天へと運んでもらうためと考えられています。

また、「西洋社会では、比較的最近まで、葬儀費用と葬儀内容は故人とその遺族の階級や社会的地位に比例したものであった」と、葬儀は社会における権力と地位とを示すメカニズムとして働いていたと説明されてきました（同書、p.398）。日本のごく普通の葬儀でも、供花や供物に故人の勤めていた会社や生前に所属したり関わった共同体の名称や名前が中央に掲げられていますから、故人の社会的な活動の状況をそれらから推察することは可能です。ユニークな墓石が多いことで知られる高野山の墓地では、故人の生前の意思や趣味、職業、遺された者の故人への思いなどを墓石によって知ることができます。

日本でも、近年の葬儀は葬儀会社に依頼することが主流になっています。葬儀にかかる費用や戒名の費用などがメディアで議論され、自然葬（遺灰を海や川や大地にまく）が提案され、葬式不要という主張も出てきました。最近では葬儀費用を保障する保険も売り出されています。西洋社会では、葬儀費用の増大が「自然死推進運動」とともに自前の葬儀に関心が高まっているということです（同書、p.398）。こうした傾向は、葬儀屋任せではない、いわゆる「自分らしく死にたい」「遺された者に迷惑をかけたくない」などの遺志が尊重されるような葬儀のあり方が「生前」に開かれた場面で話せるようになってきた、また、葬儀そのものについて人々が自分のこととして考えているということなのではないかと思われます。特に日本では東日本大震災後、家族というもの葬式というものについて、その必要性がさまざまな場面で語られることが増えたようです。

葬儀をするということ

前述のように、葬儀には死者を弔うという主たる目的があります。同時に遺族が死者と決別し、関係を再構築し、悲しみを乗りこえることを可能にしていきます。仏教者の立場から葬儀などについても多くを著している藤井正雄氏は「葬儀とは、死を嘆き悲しむだけでなく、『死』を乗りこえるために営まれます。…この世における故人への惜別であり、死者を永遠の世界に送る人生のうちで最も重要な儀式」（藤井正雄『仏事の基礎知識』講談社、1985年、p.151）と述べ、「仏教徒であれば、釈尊がそのお手本であって、この世における人生の役割を果し、生涯を閉じるときには、人生の終局として涅槃の都への凱旋式としてふさわしい葬儀が執り行われることが理想」（同書、p.152）と続けています。生前どのような者であっても、人はそれぞれの役割を果たしているのだから、生命の根源／本源に立ち戻る契機としての死は、「涅槃の都への凱旋式」となる葬儀によって見送られるべきだと言われます。「死は生命の本源にたち返ることであり、葬儀を契機に生命の尊厳を同時に考えることに、その意義がある」と、葬儀の意義は明快に説明されています。

指摘されているように、葬儀を挙行することは、生きて遺されているものにとって義務であったとしても、ある種の「諦め」へと導かれることなのでしょう。慰めと言ってもいいかもしれません。葬儀が区切りであるのかもしれません。故人となってしまった人が、思い出の中で生き始める瞬間でもあります。